



教授の呟き

第17回

理想は高く、現実は厳しく

東京海洋大学教授 苦瀬博仁

感情移入が思い込みを生む

高校時代に英語の先生に言われたことを、いまでも覚えている。『『やりたいこと (want)』と、『できること (can)』と、『すべきこと (should)』は異なる。3つを区別して、自分にあった仕事を探しなさい』と。時は移り、立場も変わり、いまでは受け売りで、学生たちに語っている。

「戦国時代のドラマを見てると、ついつい感情移入して自分も武将のつもりになってしまう。でも、もしもその時代に生きていたら、せいぜい足軽の1人だったはず」と自嘲する友人がいる。

「将来こうなれば良いなあ」と思い込んで、「なれそうにないこと」や「できそうにないこと」まで夢見てしまうことは、よくある。悲しいかな、理性よりも感情が勝ってしまうのである。

可能なことへの過剰な期待

過去に予想されていた未来と異なる現実には、思いのほか多い。例えば、パソコンやインターネットの普及はペーパーレス社会を実現させたのだろうか。通信技術の発達は、在宅勤務を大幅に増やしたのだろうか。交通ネットワークの発達は、遠距離通勤を可能にしたが、都市集中をくい止めたのだろうか。携帯電話が普及して便利になり、すれ違いはなくなったが、外出先でも上司に呼び立てられて忙

しくもなった。

予想が裏切られてしまう背景には、2つの理由がありそうだ。

第一は、シーズ（技術）とニーズ（必要）の「混同」と考えられる。例えば超音速旅客機のコンコルドは開発・実用化されたが、高速輸送よりも大量輸送のニーズが勝り、普及はしなかった。つまり技術的には可能であっても、必要に迫られなければ、実現・普及しないこともあるだろう。

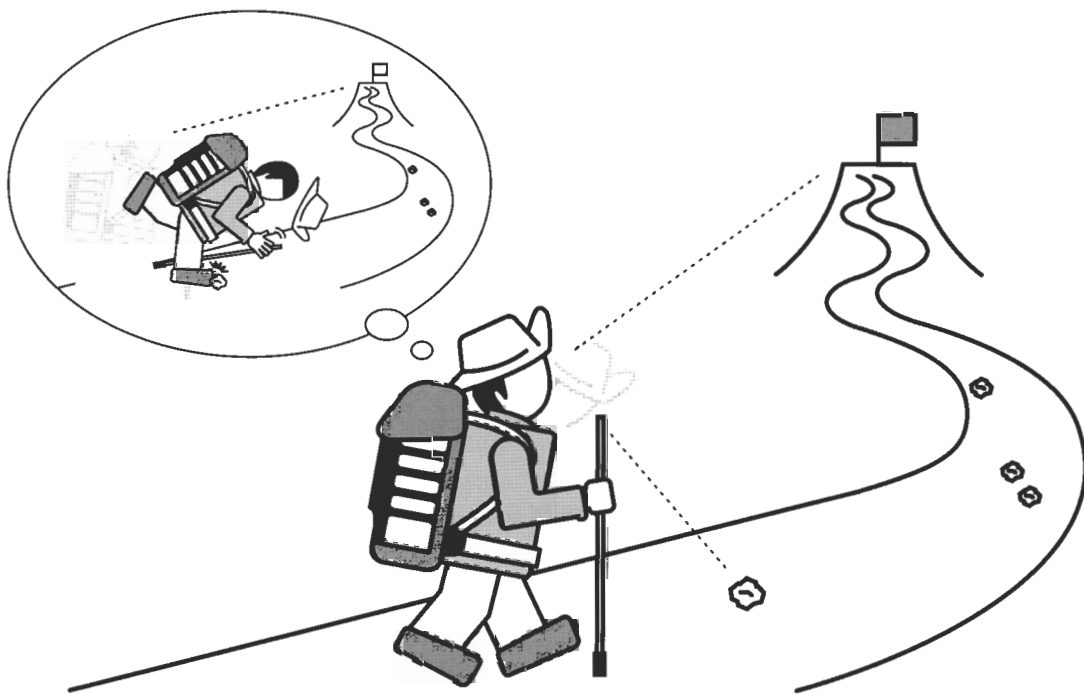
第二は、1つの事実を真実の代表と勘違いする「そそっかしさ」だろう。何事にも光と影があるとすれば、光の部分に目を奪われて影の部分に気づかないこともある。例えば電子メールの普及で、手紙を書くことは減ったが、反対に画面を容易に印刷できるようにもなった。前者が勝ればペーパーレス、後者が勝れば紙の消費量増加となる。

2つの原因の共通点は、「なってほしいこと」への想いが募って、冷静な思考が働かないことだろうか。

ニーズがあれば実現する

物流やロジスティクスの世界でも、似たようなことがありそうだ。例えば、標準化、共同配送、モーダルシフト、簡易包装の普及、配送費用の有料化などなど。これらは、最近になって言われたことなのだろうか。むしろ何年も前から言われ、それほど大きく進展しなかったものもある。

世間で言われるほどのニーズやメリットがあるならば、とうの昔に実



現しているはずである。だからこそ実現しない理由も、それなりにあるはずである。社会のニーズで「こうなればいいのに…」と期待しても、企業や消費者のニーズには適合せず「そうは問屋が卸さない」となることもあるだろう。

●●●『できること』から着実に

しかし、「明日の天気も分からないのに、将来の予想や目標設定なんて」と、悲観してもいけない。なぜなら、高く掲げるべき目標と厳しい現実の間の乖離（かいり）を分析することこそが、着実な進歩のためには必要と思えるからである。

このためには「危うい期待や身び

いきな分析」を排除し、「実現できない理由と、そのための対策」を地道に考えるべきだろう。「すべきこと」を基準に目標を掲げつつも、「できること」から着実に手を付けていくことが望まれる。この方が、かえって「この分野だけなら、この地域だけなら、この品目だけなら可能」という

答も見つかる可能性があるに違いない。

そういえば、高校の先生はこんなことも言っていた。夢見がちな若者たちを、たしなめながら諭した言葉は、「理想は高く、現実は厳しく」だった。



<p>Profile</p> <p>東京海洋大学 海洋工学部 流通情報工学科 教授</p> <p>苦瀬博仁</p> <p>（くせ ひろひと）1951年東京生まれ。73年早稲田大学理工学部土木工学科卒業。75年、同大学大学院修士課程修了。81年、同大学大学院博士課程修了後、日本国土開発に入社。86年から東京商船大学助教授、94年より同大学教授。2003年大学統合により、東京海洋大学教授。副学部長を経て、04年4月より評議員。94年から95年の1年間、フィリピン大学客員教授を務める。主な著書に「付加価値創造のロジスティクス」（税務経理協会）、「都市交通—都市交通計画・都市物流計画」（丸善）、「マニラ・エンジョイ・トラブル」（論創社）、「明日の都市交通政策」（成文堂）</p>	
---	--